医療最前線
>>>vol.77

川崎医科大学附属病院
高度救命救急センター 救急科

椎野泰和 センター長・教授
Shiino Yasukazu
■専門医
日本救急医学会救急科専門医

Report!

軽症から重症まで、チーム医療で命をつなぐ

ドクターヘリ、チームワークを駆使した川崎学園の救急医療。

当院は、一九七九年に岡山県初の「救命救急センター」に、一九九四年には同じく岡山県で初めて「高度救命救急センター」に指定された。現在、当センターおよび救急科を率いる椎野教授は川崎学園独自の救急医療をこう説明する。「開設当初より、大学病院附属の救命救急センターであるにもかかわらず、軽症・重症問わずすべての救急患者さんを受け入れてきました。これは川崎学園の理念が形となり、受け継がれている証といえます」。

また、二〇〇一年四月からは、医師を救急現場に運ぶドクターヘリの運航を全国に先駆けて開始し、今年で二〇年を迎えた。自らもドクターヘリに搭乗し、長年治療に携わる椎野教授は当ヘリの特長を、「最大のメリットは『医師がいち早く現場に到着し、治療を始められること』。事故などによる重症外傷や急性心筋梗塞、脳卒中などは治療の遅れが致命傷になるケースが多く、治療開始までの時間短縮は、救命や後遺症の有無に大きな影響を与えます」と強調する。「加えてドクターヘリは、地域医療への貢献も大きく、事実、出動要請が多いのは、都市部と比べて救急病院が少なく、当センターからも距離がある地区です。ドクターヘリがあることで、救急病院が少ないエリアも短時間で搬送できるため、地域の医療格差を埋める役割もあります」と続けた。

二〇年にわたって「命をつないできた」ドクターヘリ。そして初期救急から三次救急まで、すべての救急患者を担い、近隣県を含めた広域をカバーする「高度救命救急センター」。そこに欠かすことができないのが川崎学園独自のチーム医療である。

椎野教授は当センターのチーム医療について、「救急科の医師、看護師だけではなく、すべての医療従事者の力が結束してこそ、命をつないでいくことができると、日々感じています。みんなが患者さんのために力になれるような救命救急センターを作りたい」と続けた。

今後、川崎学園の救急医療教育の大きなステップとして、二〇二二年四月に「川崎医療福祉大学 健康体育学科・救急救命士養成コース」が開設される予定。当コースの開設で川崎学園の救急医療教育体制に必要なすべてのピースが揃うことになり、各方面からさらに期待が集まっている。「最後まで立っていられる医師になって、ひとりでも多くの人を助けたいという一心で日々取り組んでいます。また、今後は、そういった医師を育てることも重要だと思っています」。そう話す椎野教授の言葉は、医療人としての使命感に満ちていた。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
☎086-462-1111
https://h.kawasaki-m.ac.jp

Emergency and Critical care

「真夏の炎天下で心臓マッサージを30分以上続けたこともあります」と話す椎野教授。機内には心電図モニター、超音波検査装置などの医療機器や医薬品を搭載。状況により治療は機内でも継続され、患者は「高度救命救急センター」などに搬送される。

スタッフが一丸となってチームで救急医療に取り組む救急科。ICU病棟でもカンファレンスを行ない、チームで情報を共有している。

ドクターヘリは高度約600mを時速220kmで飛行し、約20分で現場に到着する。岡山県内だけでなく、広島県・香川県・兵庫県の一部までカバーしている。

フライトナースはドクターヘリに医師とともに搭乗し、救命患者の処置を医師と行なう救命医療のスペシャリスト。普段は「高度救命救急センター」に勤務する看護師。白衣ではなく、このブルーのフライトスーツが空を飛ぶ看護師の証だ。

※写真は取材用に撮影したものです

■2021年12月25日号掲載
本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。